

韓国の人気観光スポット ‘北村（ブックチョン）’

韓国といえば骨付きカルビやユッケなどのグルメが特に有名ですが、最近外国人観光客の間では‘北村（ブックチョン）’が人気スポットになっています。この地域は王朝時代の宮殿である景福宮（キョンボックン）や昌徳宮（チャンドックン）の近くに位置し、朝鮮時代の貴族たちが暮らしていた‘韓屋（ハノク）’と呼ばれる伝統家屋が密集しています。韓屋（ハノク）とは大門を有する中庭を台所や居間などがぐると囲む瓦や茅葺屋根の建築形態であり、風水の‘背山臨水（山を背後にして、水を前方に臨む）’を原則としています。夏は風通しのいい板の間で涼しく過ごすことができ、冬は部屋がオンドル（韓国の床暖房）で暖められます。玄関はなく、庭から各部屋に直接出入りできるのが特徴です。現代の韓国の家ではほとんどの家が温水床暖房ですが、当時の暖房は床下から地上の煙突に通じるトンネルを石で作り、かまどから発生する煙を床下のトンネルを通して部屋全体を暖めるものでした。



そんな伝統家屋を再利用したおしゃれなカフェやギャラリーなどが点在する北村では、伝統と現代が融合した異空間を味わうことができます。また、キムチ作りや伝統工芸などを用いた簡単なアクセサリー作りを体験できる店もあり、毎日女性たちでにぎわっています。特に外国人観光客にはチマチョゴリを着て写真撮影できる店が人気のようです。



散策後は自然食材を使った体に優しい食事はいかがでしょう。北村にはスローフードをコンセプトにした店が多くあります。韓国の伝統料理には欠かせない松の実やナツメなどを米と一緒にハスの葉に包んで蒸した料理、1年以上漬けた酸味の利いたキムチと豚肉の煮込み料理は絶品の美味しさでリピーターが絶えません。

伝統家屋での宿泊も人気を呼び、ホテル並みのサービスを提供する一日4組限定の高級韓屋（ハノク）や、家族や友達など大人数で気軽に宿泊できる施設もあります。夫婦で経営している施設では、まるで親戚の家に遊び

に来たようなアットホームな雰囲気があります。中庭の縁側に座りながら、旅する者たちと語り合うのも楽しいかもしれません。



一方、韓国国内でも現代の建築物とは違った韓屋（ハノク）の匠の精神や繊細さが見直されています。そのため、マンション内部のリフォームに伝統建築の要素を取り入れる事例も増えてきているそうです。例えば、土と藁が混ざった壁紙などや、扉や窓に天然パルプを使用する例が挙げられます。現代病ともいわれるアトピー性皮膚炎の治療にも効果があるそうです。忙しい私たち現代人は便利な生活を求める一方、生活に癒しや安らぎを求めています。韓国のこのような現状は日本の古民家が一時人気を集めたことに通じるのかもしれません。

そして、この地域で特に魅力的な写真スポット8箇所は‘北村八景’と呼ばれ、徒歩ですべて周る場合は2時間半ほど所要されます。高台と路地裏という乗用車で観光は不向きな環境において、最近韓国初の‘人力車ツアー’ビジネスに注目が集まっています。これは人力車に揺られながら、北村の歴

史や観光案内を楽しめるツアーであり、2016年までに3万5千人以上の人に利用されたそうです。またその功績が認められ、2013年には韓国観光公社から創造観光企業大賞を受賞し、2015年は文化体育観光部から創造観光企業に選ばれた経歴があります。残念ながら現在、外国語ガイド付きのツアーは英語と中国語のみとなっています。

このビジネスを始めた青年は、アメリカ留学後に外資系証券会社で働くものの生きがいを見出せずに将来を模索するなか、アメリカ留学中に人力車を引くアルバイトをした経験を活かそうと考えたそうです。



人力車に乗りながら車夫との会話を楽しんだり、流れる景色を楽しんだり、路地裏をくまなく周りながら王朝時代に思いを馳せる、ゆっくりとした贅沢な時間を皆さんも味わってみてはいかがでしょうか。

筆者紹介

柳鍾宇 (ユ ジョンウ)

GIP Korea代表弁理士。ソウル大学電気工学部を卒業。2009年弁理士登録。弁理士になる前は(株)LGディスプレイで設備購買及び技術営業の日本担当を務める。前職の特許事務所では、最初は(株)サムスンの特許明細書作成/中間処理/外国出願などを行い、後に日本企業の韓国出願を担当。趣味はゴルフ。